

2022 年 9 月 25 日（日）「来るべき時に備えて」

ヨハネの黙示録 1:1-3（その 2）

1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストに与え、それをキリストが天使を送って僕ヨハネに知らせたものである。2 ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてを証した。3 この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて中に記されたことを守る者たちは、幸いだ。時が迫っているからである。

【序論】

近年、私たちは直筆の手紙をどれくらいの頻度で書いているでしょうか。電子メールや SNS が発達し、捺印さえも電子化が進む今、手書きの手紙を誰かに送る機会はだんだん減ってきているのではないか。文章そのものはパソコンで打ち込み、サインだけ手書きにするというスタイルもよく採られるでしょう。牧師業に携わっておりますとペンを持つ機会はそこそこあるとはいえ、それでも書く度に自分の字が下手になってきていることを実感せざるをえません。また、日頃パソコンで手軽に文章を修正できる環境にいますと、その場で考えた文をミスなく手で書き記すことが苦手になってきています。まずは書いてみて、後で推敲すればよいと、心のどこかで思っている。よって、一度パソコンでまとめた文章を手書きで清書するという二段階作業を取らなくてはならない今日この頃です。

ヨハネの黙示録は「ヨハネ」という人物が遠く離れている信徒に向けて書いた「手紙」でした。奴隷のように強制労働を強いられる中、疲労困憊で眠りに就いたとき、示された幻を書き留めたのでしょうか。どんな紙に、どんなペンで、どのような机で、どんな姿勢でこれを書いたのだろうか。そんなことを思い巡らせながら本書を読み進めております。電気もない薄暗がりの中、不衛生な環境の下で、ボロボロのパピルスに一文字一文字綴ったのではないか。そんな老僕ヨハネの姿を想像しながら、この「愛の手紙」を一ページずつ開いていきたいと思います。

【本論】

前回は 1 節だけを扱いましたが、今日は 2～3 節を中心に見てまいります。ヨハネの黙示録の性質を三つのポイントでまとめてみました。

- ①キリストの証
- ②預言のことは
- ③時の切迫性

本論 1. キリストの証

ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてを証した。(1:2) 本節の中だけで「証し」ということばが二回出てきますが、原文を見てみますと同一語根の動詞と名詞が使われていることが分かります (μαρτυρέω／μαρτυρία)。基本的な意味は「目撃証人 (になる)」「証言 (をする)」「証 (を立てる)」であり、彼がその目で復活の主イエスを見たこと、その方からの啓示の幻を書き留めたことが本書冒頭で宣言されているのです。本書の終わりではもう一度釘が刺され、何者もこの証言を曲げることは許されないと、呪いを込めた誓いが立てられています。

この書の預言の言葉を聞くすべての者に、私は証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書に書いてある命の木と聖なる都から、その者が受け取る分け前を取り去るであろう。(22:18-19)

それゆえに、本書から説教を語る者は細心の注意を払って臨まなくてはなりません。説教者もまたキリストの証人となる。ヨハネに与えられた啓示は、そのままでは何が語られているのか、現代の読者にはほとんど分からないでしょう。ここで用いられている象徴的な言葉の意味を探り、それが現代起きている類似 (あるいは合致) する出来事とどう結びついてくるか、よく読み取る必要があるのです。

ヨハネは誰に対して主イエスの証を立てようとしているか。その対象は信仰を持つ信徒たちであって、未信者に向けられていたものではありません。前回も申しましたように、本書には多くの比喩や象徴的表現が出てきますが、それが何を指すか、おそらく当時の読者には理解ができたと思われます。それは、彼らが旧約聖書と黙示文学をよく知っていたからであり、キリスト教徒の迫害の直中にあってヨハネが誰を指して語っているのか、ピンとくるものがあつたはずなのです。

黙示文学者たちは、国家や個人を表す獣や鳥や怪物、特別な意味を伝える数字を用いました (黙示録では、女と竜、二頭の獣、42 ヶ月、666、14 万 4000 人、大淫婦、大バビロンなど)。更に、天使と悪魔、疫病・飢饉・旱魃といった自然災害、戦争や政治的・社会的崩壊を含む宇宙規模の災害も出てきます。

私たち読者が注意深く時代を読み取らなくてはならないのは、今世界で次々に起きてきている出来事がそれに当てはまるように見えることです¹。コロナ、サル痘といった疫病による世界的混乱、オランダ、イギリス、オーストラリアなどの政府による農業や酪農の大幅な引締め、スリランカ、ペルー、エクアドル、パナマ、カザフスタンなどで起きている食糧やエネルギー不足による暴動、国土の 3 分の 1 を覆ったパキスタンの洪水 (現在 1100 万人の人々が飢餓状態にある)、レバノンでは食糧も水もお金もエネルギーもなく、支援国すら失い、電気を作るために超有毒な物質を燃やさざるをえず、治安は崩壊し刑務所から囚人が逃げ出している状況、アメリカの西部から中部、中国、韓国、東アフリカ、ヨーロッパ各地で起きている大旱魃と天然ガスの枯渇、今年の 2 月に始まったウクライナ紛争はいよいよ

第三次世界大戦に進展しつつあり、台湾有事もいつ本格化されるか分かりません。これらの出来事をそのまま黙示録の預言に当てはめてよいかどうかは注意深く発言しなくてはなりませんが、「終末的現象」と言うに足る出来事と言って間違いではないでしょう。

本論 2. 預言のことば

この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて中に記されたことを守る者たちは、幸いだ。

(1:3a)

ヨハネの黙示録の特徴は予言的性質を色濃く持っているということです。未来に何が起きるかをあらかじめ信徒たちに知らせ、心の準備をさせ、それにふさわしい生き方を志していくよう導きます。それゆえに、神からの命令、指示といった指導的内容も含まれていることから「預言書」とも呼ばれます。2～3章にかけて、7つの教会に宛てたメッセージが綴られていますが、それぞれの教会がその時代に直面していた問題や課題を扱っています。それらの教会に対して、ヨハネは主イエスからの指導のことばを伝えている。具体的に捨てるべき罪が示されたり、評価すべきことが述べられたり、教会の霊的状态が指摘されたり。これは、旧約預言書で預言者たちが神の厳しいメッセージを民に向けて語っていたことと共通しています。

「朗読する」と言われているところから想像できるのは、本書が「7つの（地域の）教会」の中で回覧されることを意図した「手紙」であったということです。その性質は、パウロが諸教会へ向けて書き送った牧会的な手紙と似ており、巡回書簡として各教会の礼拝の場で回し読みされたであろうということです。その教会の礼拝司式者が本書の巻物を広げ、通して読み上げたのかもしれませんが。それが今で言うところの「説教」そのものとして会衆に聞かれた。礼拝がそのような形で成り立っていた。更に、その「書簡」はすぐに次の教会へ回されてしまうので、大急ぎで写本が作られたと思われます。それぞれの教会にそのことばを残し、何度も読み返すことができるように、一字一字書き写した写字生がいたはずなのです。書き写すことによって、書いた人の心を考えた。危険を掻い潜ってこの「書簡」を届けてくれた友の思いを聞き取った。私たち読者は、そのような「見えない行間」を読み取りながら、本書のページをめくっていきたい。

朗読されたことばは、聞き流されて終わってはいけません。「聞いて中に記されたことを守る」ことが求められています。ただ実際、聞いて行動に移せる人は多くないことは、歴史が証明しています。私たちは日頃、「危機管理」ということを頭の片隅で考えてはいるものの、まだ見ぬ未来の危機に対して今行動するのはなかなか腰の重いことではないでしょうか。一般的に、（例えば、地震や戦争などの）危機に対する人々の対応というのは、6つに分類されると言われます。

- ・ そのうち何とかなるだろう
- ・ 明るい未来が待っているさ
- ・ そんなこと絶対に起こらない
- ・ もうダメだ、諦めよう
- ・ そこまでひどいことにはならないよ
- ・ 真剣にリスク管理をしよう

この中でリスクに対応できる可能性があるのは最後の人だけであり、その中でも更に、聞いて何もしない人と実行する人に分かれます。これは「霊的危機管理」においても同様のことが言えるでしょう。御言葉を聞いて心に示されることがあるならば、それを明日に先延ばしにしないで今日行なうことが大切です。明日は明後日に、明後日は明々後日になりやすい。

2節の終わりに「**幸い**」ということばが出てきます。これは詩篇 1:1 の冒頭にある「幸いなるかな」を髣髴させます。また、主イエスが山上の説教の中で何度も言われた「幸いである」をも思い起こさせます。この「幸い」ということばは、黙示録の中で7回出てきて(14:13、16:15、19:9、20:6、22:7、14)、折々に特徴づけるものとなっています。「幸い」とは、神様が私たちの中に置いてくださっている好ましい状態であり、「祝福」と言い換えてもよいでしょう。神が私たちと共におられることをひしひしと感じる、内側から湧き出る平安であります。

本論 3. 時の切迫性

時が迫っているからである。(1:3b)

ここで言われている「**時** (καιρός)」とは何を指すのでしょうか。これは隠された真理です。ここには基本的に二つの意味が込められており、第一にキリストの来臨の時、第二に歴史の完成の時を表します。

きょうだいたち、裁かれることがないように、互いに不平を言ってはなりません。見なさい、裁く方が戸口に立っておられます。(ヤコブ 5:9)

主イエスは何のために来臨されるのか。それは、この世を審くためであり、贖いを完成に至らせるためです。すべての悪が滅ぼされ、永遠の神の国が完成する日が来る。それは約束されていることであり、これこそがキリスト者の希望であります。

それと同時に、この「時」には「苦難の時」という意味も含まれているでしょう。迫り来る危機に対して備えて生きている必要がある。各国で起きていることを対岸の火事として見ているのは危険なことです。日本も危機に取り囲まれているということを忘れてはいけません。この世にあってキリストの証人として生き、世の終わりまで福音のことばを残していくことができるように、私たちもベストを尽くしたい。

ヨハネの黙示録が書かれた第一世紀の終わり頃、時はローマ帝国による迫害の真っ只中でした。そのような状況下で歩んでいた信徒たちはどのような思いで集まっていたのでしょうか。使徒ヨハネからの手紙を今か今かと待ち望んでいたのではないか。ウクライナ紛争が勃発したとき、多くの国民が避難することを余儀なくされましたが、その時、防空壕に隠れていた人々が求めていたものは、食糧や水だけでなく、聖書のメッセージであったと聞きます。人は苦しいとき、魂の渇きを潤してくれる御言葉が必要なのです。主イエスのことばが思い出されます。

イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる』と書いてある。』(マタイ 4:4)

世界が混乱の渦に巻き込まれようとしている時、今こそ神のことばが必要なのではないのでしょうか。私たちはいずれこの世を去ることになります。その時、最後まで握り締めているもの、心に置き続けるべきもの、失われないものは、主イエス・キリストにある神との永遠の交わりです。

【結論】

黙示録からの説教は、今のところ月末にさせていただいております。ただ、一ヶ月の間に世界が大きく動きますので、状況に応じて頻度の調整をするかもしれません。今という時代をしっかりと見極め、私たちにとって最も大切なものを心に抱き続け、できることは行動に移し、御言葉に基づく希望をもって歩んでいきたいと思えます。一人びとりの上に主の守りと平安がありますように。

【祈り】

初めであり終わりであられるイエス・キリストの父なる神様。何という時代がやって来ていることでしょうか。全世界の民が悲鳴を上げています。明日食べるものもない人々、真冬の暖を取ることでできない人々、激しいインフレで物資を購入することもできない人々、災害や紛争で住む場所を奪われた人々……。彼らを憐れみ、助けの御手を差し伸べてください。私たちにとっても人事ではありません。心を備え、魂の備えをして生きることができますように。如何なる時にも、私たちの主イエス・キリストを見上げて歩むことができるよう、お導きください。一人びとりの生活の中心に聖霊がご臨在くださいますようお願いいたします。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
御言葉により教会の霊性を整え、来るべき日に備えさせ給う、父なる神の愛、
時代を見極める目を与え、各々を適切な生き方へと導き給う、主イエス・キリストの恵み、
神のことばへの飢え渴きを通し、信者の思いを常に永遠へと向けさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

¹ 日本のメディアではほとんど報じられないが、現在世界は「グレートリセット」の真っ只中にある。これを理解しなくては、今世界中で起きている諸現象に対してただ漠然とした不安を抱き、翻弄されるばかりとなってしまうだろう。グレートリセットとは、経済、社会、教育、農業などの分野において、これまでの社会秩序を根底から覆し、全く異なる世界を造り上げることである（参照：『グレート・リセット 〜ダボス会議で語られるアフターコロナの世界〜』日経ナショナル・ジオグラフィック社、2020）。この計画はクラウド・シュワブが主催する「世界経済フォーラム」（通称ダボス会議）に集まる世界の超富裕層たちによって話し合われたもので、2020～2030 年にかけて実施されていくという。そこで目指されているのは新世界秩序（The New World Order）の樹立であり、全世界の政府を統一し（新世界政府または世界統一政府）、人民を一元管理する新共産主義と呼ばれる世界である。そこで掲げられている目標は以下の通り。①既成秩序と政府の廃止 ②私有財産の廃止 ③遺産相続の廃止 ④愛国主義の廃止 ⑤全宗教の廃止 ⑥家庭、道徳の廃止および児童教育の廃止 ⑦世界政府の樹立。この計画が実現した場合、庶民は一面「平等」にはなるが、これまで中間富裕層が保有してきた富は上層部（国際金融資本）によって吸い取られ、大多数の人々は何も所有せず、彼らから「与えられるもの」だけで生きる世界になる（ことが目論まれている）。ダボス会議で掲げられている「You'll own nothing. And you'll be happy」（<https://www.facebook.com/watch/?v=10153920524981479>）という表題は、そのことを予想していると言われ、そのために一度各国の経済を崩壊させ、ベーシックインカムや配給制を導入しやすい環境づくりが促進される（一例として、スリランカは経済破綻したと同時に QR コードによる配給性が直ちに導入された）。結果として、世界の富は一極集中となり、極度の貧富の差が生じる。この目標の実現のために、気候変動、戦争、疫病、生物兵器、食糧危機、エネルギー危機など、あらゆる手段が用いられていく。その筆頭となって動き回っているのがマイクロソフト社のビルゲイツや投資家ジョージ・ソロスであり、彼らは言わば国際金融資本の使い走りのように、生物兵器やマイクロチップの開発、戦争の画策に明け暮れている）。2020 年に始まったコロナパンデミックはグレートリセットの序章に過ぎず、これから長期に亘る世界秩序の崩壊が進んでいくであろう。2023～2024 年は一つの山場になると言われている。

別の言葉で言えば「グローバリズムの完成」が目指されているわけであるが、その対極にある「ナショナリズム（より正確には「反グローバリズム」）」に立つ人々はこの計画に強く反対している（プーチン、トランプ、フランスのルペン、イタリアのメローニなど）。米国左派である民主党は率先してグレートリセットを推し進め、EU 加盟国の多くもそれに追随している（EU 中央のハンガリーは異色にもナショナリズムに立っている）。EU はグローバリズムの象徴とも言える組織であり、国家の上に立つ「見えない政府機関」が決定する事柄に各国政府は従わなければならない。2016 年にイギリスは EU を離脱したが、その理由は EU 全域でグローバリズムが進んだ結果、中東移民流入の問題が生じ、イギリス国民の多くが職を失い、彼らが納めてきた税金が移民に当てがわれていくことに対する国民の不満の現れであった。移民問題はスウェーデン、ドイツ、イタリアなどでも顕著に現れ、スウェーデンでは 4 人に 1 人の女性が性犯罪の被害者になっているという。イギリスは EU 離脱を果たしたものの、グローバリズムの本拠地であり、英守旧派と呼ばれる人々が根強く勢力を保持し続け、莫大な資金力でもって各国の選挙活動を陰で操作している（この闇組織のことを「スーパーPAC」または「特別政治活動委員会」と呼ぶ）。

我らの日本においては、安倍元首相はナショナリスティックでありながらも西側と東側との関係のバランスを保とうと奔走していたが、現在の自民党はグローバリズムに深く傾倒しており、岸田首相がダボス会議での所信表明の中で以下のように発言しているのを動画で見ることができる。

「今我々はグレートリセットの先の世界を描いていかななくてはなりません。新しい時代を切り開くためには、価値観や置かれている状況、立場の違いを越えて、対話を積み重ねることで、多くの人が信頼によってつながることが極めて重要です。」(<https://www.youtube.com/watch?v=aA7waDFC-iE>)

このような視点に立って世界を見ていくと、コロナパンデミック、ウクライナ紛争が立て続けに起きた理由が分かってくるだろう。2007 年に開催されたミュンヘン安全保障会議で、プーチンは諸国のリーダーが集まっている場で「ロシアは世界統一政府の構想に反対する」と公言したため(https://www.youtube.com/watch?v=DFqfrJG9_BU)、国際金融資本とプーチンの戦いはここから本格化した。ユダヤ人国際金融資本家たちは米国のウィルソン大統領就任以来 100 年に亘って米国の政治、金融、メインストリームメディア、司法省、FBI、弁護団を陰で支配してきたが(ヘンリー・キッシンジャー自身がそのことを自書の中で述べている)、プーチンがその存在と計画を暗に暴露したところから世界の流れは一変した。このような史実に基づいて現在の世界を見ていくと、東西対立構造が整理しやすくなる。

ちなみに、奥村は右派と左派のいずれを支持しているわけでもなく、イエス・キリストの福音に基づく「神の国の樹立」という第三の道を探究し続けていることを加えておきたい。